木村先生無かりせば…

川 端 香 男 里

生誕百年の祭

私たちが木村彰一先生に記念論文集を捧げる光栄を得たのは，今回が初めてではない。先生が還暦の年を迎えられ, 東京大学を退官された機会に, 先生の同僚弟子が相集って『ロシア・西欧・日本』という標題を冠した 40 編からなる論文集を刊行した。日本の旧来のロシア語・ロシア文学研究の枠の中に入りきらないスラヴ学，比較文学領域の研究の成果が数多くここに集められている。先生の西洋古典学の豊かな学識の影響を感じさせる論文もある。この記念論文集は日本におけるスラヴ学の重要な里程標となっている。

記念論文集と言えばすぐ還暦記念のことを考えるのが一般的であるが, 没後何年というタイプの論文集もある。これは追悼の印象が強く, 故人への愛惜が主潮となる場合がある。しかし今回企画されたのは生誕百年記念タイプである。西欧では昔から，作家などの生誕百年，二百年などを記念するいわゆる「年祭」（サントウネール）行事がにぎやかに行われる習わしが定着している。今回の記念論文集は，傑出した碩学が遺された種が実を結びつつあることを祝う意味合いもある。今年 8 月に幕張で開かれる国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）の第 9 回世界大会などもそのよき例であろう。

さて話を木村先生の還暦の時に戻そう。還暦後，先生は早稲田大学に招かれ，数多くの授業をこなされるかたわら，シェンキェーヴィチの『クオ・ワディス』の翻訳を出されたほか，スラブ研究施設の機関誌『スラヴ研究』に 7 回にわたって「イーゴリ遠征譚―訳及び注」を連載，完成された。70 歳を迎え早稲田から引退された先生は，畢生のお仕事をかかえていらした。それは何とラテン語辞典の編纂であった。神田の学士会館を仕事場とされた。大学が身近にあり，若かりし日，出版社の仕事でいわゆる「カンヅメ」をされたことの多い神田の土地を仕事場とされたのはいかにも木村先生らしかった。

1986 年 1 月 5 日に木村先生は 71 歳の誕生日を祝われた。ところがこの月の 18 日のこと，学士会館での仕事中，心不全で倒れ日大病院に急送されたが，回復することなく永遠不帰の客となられた。この年の一月は寒い日が続き，亡くなられた人が多かったように記憶している。最悪の気候条件だった。

ラテン語，そして辞典となると，一体それが木村先生とどうつながるのかと訝る人もいよう。まず第一にこれは御父君のドイツ文学者木村謹治先生と関係がある。ゲーテ研究で名高い謹治先生は帝大教授時代 4 年の歳月を費やして日本最初の『和独大辞典』を出版し，

ついで同僚の相良守峰教授と力を合わせて世に名高い『木村・相良　独和辞典』を完成させた。「キムラ・サガラ」と言えば長い間独和辞典の定番であった。御子息の木村先生自身，辞書・語学入門書編纂の大ベテランであった。

本格的なラテン語の辞典を終生の仕事とされるということにはどんな理由があるのだろう。先生と雑談をしていたとき，思わず私の疑問をぶつけてみた。『考える技術』という本を読んで，ラテン語の重要性を知ってから猛烈に勉強をしたという御話しであった。「それはエルネスト・デイムネの本ではありませんか。フランス出身の聖職者で 1930 年代にアメリカでベストセラーを連発した…」という私の質問に先生は「そうだよ，だけれど，よくそんなことを知っているね」と逆に聞き返されてしまった。「この本は私の父（山本政喜）が訳したことがあるので知っている」と答えたが，「それは大変な御縁だね」と言う先生の声は優しかった。

ところで私自身勝手に木村門下と思い込んでいるが，実際に教室で教えを受けた科目は 2 科目だけである。木村先生が北大から東大文学部言語学科へ移られた年（1957 年）に，私は大学院比較文学科の修士課程に在籍していて，駒場から本郷の文学部の木村先生の授業を聴講に出かけたのだった。一つは学部の授業で，カエサルの『ガリア戦記』の講読。講読と言っても学生には一切やらせないで朗々とラテン語を朗読し，細かいコメントをつける，典雅なラテン語の響きに酔わされるひとときであった。先生がどれほどの精力をラテン語に注がれたかということがよく分かる授業であった。もう一つは大学院の演習で，ヴィノクールの『ロシア語』（パリ版のフランス語本）がテクストであった。

「ロシア文学科作り」と「第二語学としての」ロシア語

このそこはかとない，通常の師弟関係とは遠い関係にあった木村先生と私は，大袈裟に言うと，日本の国立大学全体を動かす激変の中で再び出会うことになる。

旧帝大では理科系に主眼が置かれるケースが多かったが，戦後の改革の中で目立つのは文科系学部の設置である。九州大学，名古屋大学，北海道大学にはいずれもまず法文学部が置かれた。ここからまず経済学部が独立し，ついで文学部が自立して，法文系 3 学部体制が出来上がった。北大法文学部設立にあたって尽力したのは桑木厳翼，伊藤吉之助という二人のドイツ哲学者だった。文化系学科は伝統的な哲史文（哲学科，史学科，文学科）体制でまとまった。文学科から仏文が排除され，代わりに露文が置かれることになって，外語（当時は東京外事専門学校）から木村先生が引き抜かれた。フランス嫌いの哲学者が北大の目玉になる新しい学科の創設に貢献したことになる。北大の新しい文学科は学生だけではなく，そこで教える教員をも引き付ける魅力があったらしい。国文の武田泰淳，独

文の石川道雄，露文の木村彰一とスターがそろった。この時代，庄内の哲学三羽烏と称された山形出身の三人の哲学者の活躍が目立った。阿部次郎，宮本和吉，そして伊藤吉之助である。秋田出身の木村謹治，彰一親子が濃密なドイツ的教養をもっていたことと，東北にドイツ哲学者が輩出したこととの間には深い関連がありそうである。

他方，法学部に設けられた「スラヴ研究室」はやがてスラブ研究施設，スラブ研究センターへと発展拡充を続けるが，その節目節目に木村先生は室長とか施設長という職を引き受けられ，東大に移られてからも研究員として貢献された。もし木村先生がおられなかったらどうなっていただろう。

スラヴ研究と言っても当時のソ連の国際的地位からすれば，戦略的政略的視点から出発する国際関係論や地域研究に傾斜する方向の方が重視された。スラヴ学本来のフィロロジーやフォークロア研究が軽視される傾向があった。このような状況を憂えた木村先生が国際スラヴィスト会議に働きかけて，この会議に参加する道を開かれたのだが，これは画期的な快挙であった。

戦後，ソ連という大きな存在を前にして，ロシア文学科を作るか，ロシア語を第二語学とするかという問題が多分にイデオロギーや政策論の色合いをもって論じられることが多かった。私自身大学に入ってから露文科がないということにどれだけ悩んだかわからない。先生方に言わせると，ことは簡単で，スタッフが揃わないことが原因だという。誰でも承服できるような人がいれば問題ない，というわけだ。寺田透先生のようなロシア文学のことをよく御存じな方にうかがっても，東大という仕組みの中では東大で育った人であることが望ましいとおっしゃる。東大には育てる場所がないのだから，そこで育った人を求めるわけには行かない。一時避難のような形で教養学科のフランス分科に進学した時，主任教授の前田陽一先生に同じ質問をなげかけてみたら，「それは簡単だ。君自身が勉強してロシアの専門家になればよい」。これほど明快でまた乱暴な返事はない。しかし私も内心同じようなことを考えていたのである。

東大文学部の言語学科から八杉貞利，井桁貞利それに木村彰一と専門家が出ている。しかし新しい比較文学の大学院の方が応用が利くのではあるまいかと私は考えた。修士論文にロシア文学テーマを設定し，博士課程に進んでから，フランス留学を選び，伝統あるフランス・スラヴ学の洗礼を受けた。留学 3 年目に北大文学部から札幌に来る気があるかとの問い合わせが来て，迷うことなく札幌に赴いた。29 歳の春であった。

北大のポストが空いたのは，東大でロシア語が第二語学となり，教師の需要が増えたためであった。第二語学化はソビエト科学の躍進を背景に理工系教員の強い要望が背景にあったが，中国語の第二語学化と絡んで，国立大学をかなりの期間揺るがすことになった。東大の場合は折りしも教養学科にロシア分科が増設されたが，これも主任教授候補が控えているから出来た話であった。寺田透先生が言われた東大育ちの専門家の登場である。

その間木村先生の出身母体である文学部に，英文科を中心にして露文設置運動が生れ，露語露文学予備課程のようなものも作られ，新学科設置の気運が高まった。私が駒場に呼び返されたのは，教養学科ロシア分科が設置され，本郷に新学科が生れる前夜であった。新設のロシア語ロシア文学講座に文部省から大学院設置の通達がやってきて私たちをおどろかせた。大学院設置というのは大変な難事であるというのが常識であったから，学部設置後すぐ申請したのではとても通るまいと思っていた。ところが田中角栄首相が訪ソするにあたって，ソ連側に好印象を与えるために大学院を設置したい。ついては博士課程も同時設置するというのである。文学部の講座は１講座で，博士課程の要件を満たしませんと言うと，教養学部の２講座があるであろうという返事。あっという間に木村彰一主任教授をトップに据えた博士課程が出来上がってしまった。

北大文学部，スラブ研究センター，東大教養学部教養学科ロシア分科，大学院比較文学比較文化専攻，東大文学部ロシア語ロシア文学専修課程，それに博士課程大学院。木村先生が長となって成立し，育って行った教育機関がいくつあったであろうか。木村先生無かりせば…。もし木村先生がいらっしゃらなかったら，どうなっていたであろう。ひょっとしたらロシア文学科など生まれなかったかも知れない。